

中学生はなぜ怒り、悲しみ、喜ぶのか

— 感情日誌を用いて —

速 水 敏 彦

最近、大人たちが予期できないような青少年の問題行動が示され、教育のあり方が問われているが、問題行動は彼らの感情の持ち方と密接に関係しているように思われる。援助交際、学級崩壊、いじめ等の問題の背景には、昔の青少年のそれとは異なった感情が渦巻いていることを想定せざるをえない。流行語となった「キレル」という言葉自体、彼らの独特の感情の持ち方を示しているといえよう。

しかし、どのようにしてこの問題に接近すればよいのだろうか。筆者は最もプリミティブな方法だが、現代の青少年がどのような条件下でどのような感情を抱くのかの実態を明らかにすることではないかと考える。感情研究は、近年盛んになり、貴重な知見が提出されつつあるが、感情のもたらす影響（たとえば、気分一致効果）や感情表出の問題が中心的関心事であるように見受けられる。だが、現代青年の行動の特異性の背景を明らかにするためには、まず、感情が何かに影響を与える影響過程というよりもむしろ、なぜ、そのような感情が生起するのかといった感情が生起する原因を探ることこそ、肝要に思われる。むろん、このような問題がこれまでの感情研究で全く扱われなかったわけではない。たとえば Izard, C. E (莊嚴舜哉監訳, 1996) は、喜びや驚き、怒り等の原因についても一覧表にしてまとめている。これらは参考にはなるが、ここで知りたいのは、学校生活・家庭生活を送っている生徒が、その日常生活の中でどのようなことで感情を起しているかということである。通常の日常生活の中での感情の生起というのは比較的弱いものかもしれないが、どのようなきっかけでどのような感情をどれほど感じているかをみるのが大切なのである。日常的気分の起源の問題については Thayer, R. E (1996) が検討している。また、Oatley, K (1994) は構造化された日誌を使って幸福、悲しみ、怒り、嫌悪等の感情生起について分析している。しかし、特に青少年に注目したものではない。

ところで、このような研究目標を達成するためにはどのような具体的方法が考えられるだろうか。ここで扱う

のはあくまで主観的な感情であるから観察者による報告に頼るわけにはいかない。基本的には被験者の報告を基にする以外ないであろう。しかし、日常、我々が感じる感情の種類も回数も夥しい。我々は意識が働いている限り、何らかの感情を常に感じて生活しているという言い方もできる。

そこで、被験者に特定の感情に限定して、それがどのようにして生じたのかを1日ごとに時間を追って記録してもらい感情日誌と呼ぶものを用いることにした。そして今回は特に最も基本的な感情と考えられる「怒り」、「悲しみ」、「喜び」に限定した。

方 法

被験者 公立中学2年生 α 校2クラス52名、 β 校3クラス58名、 γ 校4クラス137名 計247名（有効被調査者数）

手続き 「感情日誌」と呼ばれるものを担任の先生により配布してもらい、ウィークディの連続2日間記述するように求めた。感情日誌の形式は横は怒り、悲しみ、喜びの3つの感情が区切られており、縦は午前6時から午後12時までの時間が記してあった。被験者は3種類のうちどれかの感情が生起した場合に、およその時間帯のところになぜそのような感情が生起したのか記述するように求められた。記述するのはその都度でも1日の終わりにまとめてでもよいことにした。

ところで、自分の感情を赤裸々に吐露することは誰しも抵抗がある。特に生徒が日常的に抱く感情は当然教師に対するものも含まれており、教師が自分の感情日誌をみると考えればなかなか正直には書けない。そこで、無記名での記入はいうまでもないが、性別を記入させることも差し控えた（性を表示することで男らしい、あるいは女らしい感情表出ということが意識されるかもしれない）。さらに、回収時に教師がチェックするのではないかと心配をする生徒もいるので、感情日誌をつけ終わったら、大学の封筒にいれ密封して提出するように教示した。

結果と考察

I 全体的分析

当初、中学生が感情日誌にある程度興味を持って相当数記述してくれると予想していたが、結果的には記述された量は極めて少なかった。まったく白紙で提出した者もいたが、これらは予めデータから省いた。まず、各クラスで2日間、それぞれの感情について何回記述されているかについて試みることにした。ただし、 α 校については本来2クラスだが、収集の際クラス毎にしなかったため学校全体を1つのクラスとして扱うことにした。 β 校は3クラス、 γ 校は4クラスからなっている。

表1は8つのクラス3つの感情の2日間の記述数の平均および標準偏差である。まず、平均値に関していえることはどのクラスでも2日目は1日目に比べて低くなっていることである。これは感情の生起率がこれほど下がることは事実上考えられないので、書くことに対する煩わしさが2日目ほど意識されるためと思われる。次に3つの感情間の記述数を比較すると、「悲しみ」の記述数が他の2つの感情に比べて少ないことはほぼ共通している。とは言っても β 1クラスの2日目、 β 2クラスの1日目、 γ 4クラスの1日目は例外である。「怒り」と「喜び」の相対的割合はクラスによって違いがみられる。「喜び」の方が「怒り」よりも多いのは α 、 β 1、 β 3、 γ 3クラスとなっている。一方、「怒り」の方が「喜び」より多いのは γ 1クラスであった。 β 2クラスと γ 2ク

ラスは1日目と2日目では逆になっているし、 γ 4クラスは1日目は「喜び」の方が多いが、2日目はまったく同等になっている。「怒り」が「喜び」より多いクラスはクラスの雰囲気は何らかの問題があるのかもしれない。

次に3つの感情間の関係に関して、クラスごとに整理した（ここでは計算結果は示していない）。ほぼ有意な正の相関になっていたが、クラスによってそれはかなりまちまちである。また、同じクラスでも1日目と2日目ではかなり変化しているケースもある。同じ感情の2日間の相関関係はどうであろうか。これについても大方、有意な正の相関がみられる点では共通している。相対的に怒りの相関が最も高いのは、 γ 2クラスのみ、悲しみの相関が最も高いのは β 3クラス、 γ 1クラスであり、残りの α 、 β 1、 β 2、 γ 3、4クラスは喜びで最も高かった。相対的には「喜び」を感じる回数が最も安定しているといえよう。

これらの分析からクラスによって感情生起（記述）数が大幅に異なることがわかる。これは実際に感情生起の回数がクラスの雰囲気そのものにより異なるのか、現実の感情生起でなく、それを記述するかしないかの回数が異なるのか明らかではない。前者のように現実にクラスの雰囲気が異なり、クラスにより感情の持ち方が異なることも十分予想できる。一方、後者のように担任の教師が感情日誌を書く楽しさを話したり、あるいはできるだけたくさん書くように教示することで記述数が異なってくることも予想される。たとえば β 1クラスなどの記述

表1 クラス毎の感情記述数の平均と標準偏差

クラス	人教	1 日目			2 日目		
		怒り	悲しみ	喜び	怒り	悲しみ	喜び
α	52	1.92 (1.78)	1.50 (1.56)	2.60 (2.32)	1.40 (1.69)	1.11 (1.32)	2.19 (1.98)
β 1	23	0.73 (1.21)	0.56 (0.99)	1.17 (1.85)	0.39 (0.84)	0.65 (1.19)	0.65 (1.07)
β 2	29	1.36 (1.42)	1.89 (2.02)	2.26 (2.18)	1.68 (1.66)	0.63 (0.76)	1.26 (1.69)
β 3	16	2.25 (1.84)	2.43 (1.63)	3.44 (3.22)	1.82 (2.22)	1.25 (1.98)	2.38 (2.55)
γ 1	39	3.89 (2.91)	1.66 (2.01)	2.92 (3.19)	1.89 (1.80)	0.82 (1.07)	1.87 (2.20)
γ 2	37	2.59 (2.12)	1.38 (1.14)	1.95 (1.51)	0.95 (1.49)	0.41 (0.68)	1.05 (1.31)
γ 3	36	1.33 (2.06)	0.88 (1.27)	1.53 (2.58)	0.69 (1.21)	0.53 (1.31)	1.11 (1.72)
γ 4	35	1.11 (1.18)	1.26 (1.29)	2.17 (1.94)	1.66 (2.33)	1.14 (1.16)	1.66 (1.61)

() 内は標準偏差

資 料

表2 全体の各感情記述数の平均と標準偏差および相互相関

(N = 257)

	1 日 目			2 日 目		
	怒り	悲しみ	喜び	怒り	悲しみ	喜び
平 均	2.00	1.38	2.25	1.30	0.82	1.56
標準偏差	2.17	1.57	2.43	1.76	1.22	1.86
怒り 1		.41**	.48**	.43**	.28**	.38**
悲しみ 1			.57**	.23*	.58**	.48**
喜び 1				.33**	.51**	.70**
怒り 2					.33**	.44**
悲しみ 2						.56**

*... p < .05, **... p < .01

表3 抽出されたデータの各感情記述数の平均と標準偏差および相互相関

(N = 48)

	1 日 目			2 日 目		
	怒り	悲しみ	喜び	怒り	悲しみ	喜び
平 均	4.92	3.44	5.83	2.64	2.04	3.40
標準偏差	2.51	1.74	2.85	2.68	1.80	2.42
怒り 1		-.15	-.14	.32*	-.09	.00
悲しみ 1			.17	-.09	.51**	.48**
喜び 1				.06	.42**	.65**
怒り 2					.29*	.18
悲しみ 2						.66**

*... p < .05, **... p < .01

数は、どの感情についても少ないが、β3クラスではどの感情についても相対的に記述数が多い。従って3つの感情間の違いは明らかにクラスの雰囲気の違いを反映しているといえるが、感情の種類に関係のないクラスごとの記述数の量的相違はその他の要因を含んでいる。

上述のようなクラスによる相違があることを知った上で、次に全体としてデータ処理したものが表2である。全体的には平均記述数は1日目も2日目も「喜び」「怒り」「悲しみ」の順になっている。また、相互相関も両日で一貫しており、相対的には悲しみと喜びの関係が最も強く、怒りと悲しみの関係が最も弱くなっているが、その差はあまり大きなものではない。また、同じ感情の2日間の安定性は先のクラスごとの分析からも示唆されたように「喜び」、「悲しみ」、「怒り」の順であった。「怒り」の出現が相対的には最も変化しやすいことになる。

II 抽出された48名分の感情日誌の数量的分析

先の全体的分析で記述数が予想外に少なかったことを指摘した。一人の人間が1日中生活して「怒り」や「悲しみ」や「喜び」をほとんど感じないというようなことは現実にはありえないと思われるので、多くの生徒に書く意欲がなかったとみるのが妥当であろう。それを

どのように高めていくかは今後の課題であるが、自分の感情の生起を報告する十分な意欲がない者のデータを詳細に分析してもあまり意味がないものと考えられる。そこで、ここでは感情日誌を積極的に書こうとしたとみなされる生徒のデータだけをとりあげ、やや詳細に分析することにした。具体的な基準としては1日目、あるいは2日目に10件以上の記述がみられた者としたところ、全体で48名が抽出された。これは全体の18.7%にあたる数でかなり少ない。これだけで今回の中学生の母集団を代表しうるのかという問題がないわけではないが、ここではその方が有益であろうと判断した。

1. 48名分のデータについて先と同じように各感情の記述数の平均と標準偏差および相互相関をみたものが表3である。まず、平均値でいえば、1日目の方が2日目よりどの感情に関しても高いことや、喜び、怒り、悲しみの順で記述数が多いことは全体的傾向と一致する。しかし、相関の方で同日の3つの感情の間関係はかなり弱いものになっている。特に記述数の多い1日目では3つの感情がそれぞれ独立した様相を呈している。記述数が減る2日目には有意な相関もみられる。しかし、同じ感情間の2日間の相関が一番安定性が高いのが「喜び」、次が「悲しみ」、最も低いのが「怒り」という順序はより明確化した。

中学生はなぜ怒り、悲しみ、喜ぶのか

表4 1日以内での感情の変化

数値は平均(標準偏差)

		怒り	悲しみ	喜び
1日目	朝	2.17 (1.52)	1.58 (1.28)	1.98 (1.15)
	昼	1.75 (1.28)	1.04 (1.09)	2.23 (1.56)
	夜	1.00 (0.97)	0.85 (0.85)	1.60 (1.34)
2日目	朝	1.00 (1.18)	0.83 (0.97)	1.25 (1.14)
	昼	1.06 (1.41)	0.48 (0.68)	1.13 (1.16)
	夜	0.64 (0.89)	0.75 (0.84)	1.00 (1.19)

表5 怒りの内容分類毎の平均と標準偏差

(N = 48)

		1日目		2日目		安定性
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	
①	仲間	1.46	1.49	0.96	1.35	.55**
②	教師	0.63	0.87	0.29	0.65	.31*
③	家族	0.96	1.25	0.42	0.82	.18
④	他者	0.08	0.28	0	—	—
⑤	社会的規則	0.31	0.55	0.17	0.38	.26
⑥	自然・物	0.44	0.87	0.17	0.43	.14
⑦	自分	0.38	0.67	0.19	1.57	.20
⑧	生理的要因	0.48	0.74	0.21	0.46	-.04
⑨	共感的	0.04	0.20	0	—	—
⑩	その他	0.19	0.39	0.21	0.46	.13

*... p < .05, **... p < .01

2. さらに朝(6:00~12:00), 昼(12:00~18:00), 夜(18:00~24:00)に分類して整理したものが表4である。ほぼ共通しているのはどの感情についても家庭生活の占める割合が多い夜で回数が減少する傾向にある。また、概して朝の時間帯で感情生起の記述数が多い。しかし、例外もあり、「喜び」は1日目では昼の方が多くなっていた。朝と昼, 昼と夜, 朝と夜では感情生起回数がどの時点間で最も近似しているかについてもみてみたが、一貫した関係は見られなかった。また、1日目と2日目の朝同士, 昼同士, 夜同士の関係についてみたところ「怒り」では有意な相関はどこにもみられず、「悲しみ」では朝だけが.438で有意であった。しかし、「喜び」に関しては、朝で.424, 昼で.477, 夜で.546といずれも1%水準で有意な関係であった。

3. 次に各感情がなぜ生じたか, どのような状況で生じたかについて分類できるものは整理しようとした。ただし, これらの分類は48名だけのデータを基にしたのではない。すべてのデータをとおして眺めてみて著者が定めたものである。まず, 「怒り」に関しては①仲間(同輩, 先輩, 後輩等の仲間の言動が原因で仲間に向けられる怒り), ②教師(教師の言動が原因で教師に向けられる怒り), ③家族(家族の言動が原因で親, 兄弟等に向

けられる怒り), ④他者(よく知らない他者の言動が原因で他者に向けられる怒り), ⑤社会的規則(社会的なきまりに対する怒り), ⑥自然・物(天候や物体が原因になる怒り), ⑦自分(自分自身の行動やその結果が原因で生じる怒り), ⑧生理的要因(空腹, 睡魔等生理的原因で生じる怒り), ⑨共感的怒り(他者が何かに怒っているのに共感して生じる怒り), ⑩その他の10カテゴリーに分類した。その回数の平均値は表5にみられるようであり, 1日目についても2日目についても, ①仲間, ③家族, ②教師の順で高い。また, 2日間の10カテゴリー, 20×20の相関もみたが, カテゴリー間で特に関係の深いものは見られなかった。ただし, ①と②の1日目と2日目の相関は1%水準で有意で, それぞれ, .55と.31であった。

次に「悲しみ」についてみてみよう。この感情が生じた原因についても10カテゴリーに分類した。①自分の行動結果(成績が悪いなど自分の行動結果が原因), ②偶然(偶然的な運の悪さなどが原因), ③媒体からの感情伝播(テレビや新聞をみて), ④未来の想定(好ましくない未来を想定することによって), ⑤生理的要因(体の調子が悪いなど), ⑥別離(人や動物との別れ), ⑦对人的要因(他者によってひきおこされるもの), ⑧共感

資 料

表6 悲しみの内容分類毎の平均と標準偏差

(N = 48)

	1 日 目		2 日 目		安定性
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
①自分の行動結果	1.20	0.96	0.25	0.56	.25
②偶 然	0.40	0.81	0.13	0.39	.24
③媒体感情伝播	0.15	0.46	0.02	0.14	-.04
④未 来 の 想 定	0.13	0.33	0.19	0.45	.41**
⑤生 理 的 要 因	0.60	1.08	0.50	1.07	.41**
⑥別 離	0.06	0.24	0.02	0.14	-.04
⑦対 人 的 要 因	0.48	0.77	0.35	0.67	.07
⑧共 感 的	0.08	0.28	0.02	0.14	-.04
⑨一 時 的 気 分	0.06	0.24	0.02	0.14	.56**
⑩そ の 他	0.29	0.58	0.47	0.82	-.16

**... p < .01

表7 喜びの内容分類毎の平均と標準偏差

(N = 48)

	1 日 目		2 日 目		安定性
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
①達成(能動的)	1.10	1.15	0.72	1.02	.53**
②達成(受動的)	0.10	0.31	0.06	0.32	.36*
③親和(能動的)	0.56	0.84	0.23	0.47	.36*
④親和(受動的)	0.54	0.99	0.31	0.55	.58**
⑤生 理 的 満 足	1.52	1.37	0.77	1.09	.69**
⑥脱 日 常	0.73	1.01	0.52	0.95	.17
⑦趣 味 ・ 娯 楽	0.92	0.90	0.50	0.62	.19
⑧他 者 の 行 為	0.04	0.20	0	—	—
⑨共 感 的	0	—	0	—	—
⑩そ の 他	0.29	0.58	0.16	0.43	-.11

*... p < .05, **... p < .01

的要因(他者の悲しみに共感する), ⑨一時的気分(なんとなく悲しくなる), ⑩その他。

これらの頻度の平均は表6にみるとおりである。1日目では, ①自分の行動結果が, 最も高くなっているが, 2日目は必ずしもそうでない。なお, この内訳はテスト結果が悪かったというものが圧倒的に多かった。次に相対的に多いのは⑤生理的要因であり, 腹が痛いというのが比較的多かった。2回の安定性が高いのは④未来の想定, ⑤生理的要因, ⑨一時的気分の3つであり, それぞれ .41, .41, .56で1%水準で有意であった。また1回目の④と⑨の相関は .42で, 有意(p < .01)であった。このようなことで悲しみを感じやすいのは空想的な性格のためかもしれない。

「喜び」の感情生起の原因も10に分類した。①達成(能動的)(自ら働きかけた結果としての喜び), ②達成(受動的, 偶然)(人からいわれたことをやり遂げた結果としての達成, 意志的にでなく偶然できる), ③親和(能動的)(みんなと仲良くやっていこうと努力して, うまくいって喜びを感じる), ④親和(受動的, 偶然)(た

例えば偶然好きな友人にあったような場合), ⑤生理的満足(食欲などが満たされた場合), ⑥脱日常(予定されていた授業やクラブがなくなったような場合), ⑦趣味・娯楽・遊び(娯楽や趣味に興じる場合), ⑧他者の行為(他者の行為が立派であるような場合), ⑨共感的(他の人の喜びを共感的に体験する), ⑩その他。表7に示すように生起頻度が相対的に高いのは1日目も2日目も①達成(能動的)と⑤生理的満足であった。特に前者では試験の点数がよかった, 後者では給食がおいしかったという内容が多かった。その他にも⑥脱日常, ⑦趣味・娯楽・遊びの頻度も高かったが, 前者はやや予想外のもので, 先生が出張で居なくてうれしいとか, 嫌いな人が欠席でうれしいといったものまで含んでいる。後者に関しては好きなテレビ番組をみたり, テレビゲームに勝って喜びを感じるというものが多かった。10カテゴリー間の有意な相関は1日目の③と⑥の間, ④と⑧の間にみられたが, 理由はよくわからない。また, 両日間の安定性という意味では①達成(能動的)が .53, ②達成(受身的, 偶然)で .36, ③親和(能動的)で .36, ④親和

(受け身的、偶然)で .58, ⑤生理的満足で .69, が有意であった。

Ⅲ 個別の質的分析

次に、生徒一人一人について特徴的な点を記述してみよう。

生徒1は怒りの感情に偏っているのが特徴である。特にクラブの後輩が顔を合わせたのに自分を無視して通り過ぎたり、隠れた(異なる時間に2人も)ことやクラブに来ていないことを怒っている。また、家へ帰ってから怒りもやや過激である。次のような記述がある「今日もいとこが来ていた。大嫌いだ。きのうはいばってなまいきで殺してやろうかと思った。家にくるんじゃない。」

生徒2はすべての記述がきわめて短い文章になっている。そして喜びは「寝ていられた」「朝ご飯を食べれた」「昼食が食べれた」「風呂最高」「今日も眠れる」といった生理的満足が2日間とも多い。また、悲しみの中に「今日も1日始まってしまったから」というのがある。

生徒3は相対的に「悲しみ」が多いが、次のようなややたわいのないものである。「時間がなく、ごはんが少ししか食べれなかった」「卒業式の歌の練習で声があまりでなかった」「体育のバスケットでシュートがなかなかはいらなかった、しかもテストだった」「塾があった」

生徒4は非常に小さな文字で几帳面に書いている。教師との関係で感情が生起しているのが目立つ。「一生懸命歩いてきたのに、先生に『遅い』といわれてむかついた」「掃除をがんばってやっているのに、先生はみているだけでさぼるとすぐに怒る」「下校の時、廊下で友達を待っていたら先生が『早く帰りなさい』というのでむかついた」一方、喜びも教師に関係したのがある。「途中まで先生がいなかったのでとてもうれしい」

生徒5は特定のクラスの仲間に悪口を言われて、学校にいる間中怒っている様子が窺える。その悪口は「○○女」「○○号」「○○物」といった命名のようである。その相手に対して「死んでほしい」という言葉もみられる。

生徒6は喜びの記述が特に多い。些細なことにも喜びを感じる生徒で親和動機が高い生徒のように思える。「教室を移動する時、好きな先生に会えた」「久しぶりに○○としゃべった」「今日は男子がちゃんとそうじをしてくれた」「お兄ちゃんが帰ってきた」

生徒7の場合、すべての文章が長いのか、特に1日目は午前中に集中している。つまり、午前中の感情について記述し疲れてしまい、後のことについては記述しなかったようにも思える。「怒り」には過激な記述もみられる。「毎日つまらない、人生を終わらせたい」「先生が○○なんて食べていないのにあまい匂いがするとか言っ

てきてマジでうるさい。死ね死ね死ね」。また、生徒は女性らしい悲しみも記している「起きたらニキビがつぶれて血が出た」「髪がボサ、昨日セットしたのに」

生徒8の「怒り」には生徒1と同様、後輩から無視されたことが原因のものが含まれている。また、母親が何か尋ねることに対して鬱陶しいと感じている。また、歌手のV6に傾倒しているようで怒り(「V6のカレンダーがない」)も悲しみ(「V6 どおしてテレビにでないの」)も喜び(「V6のカレンダーゲット、うれしい、ハッピー」)も感じている。

生徒9は「怒り」と「喜び」だけで「悲しみ」はまったく記述されていない。隣の級友が話しかけてきただけで、また、先生が自分の近くにくるだけで立腹している。

生徒10の字数は相当に多い。「悲しみ」の記述が相対的に多いが、たとえば、悪い結果のテストを返された場合も単に悪かったことに対してでなく「いつもは先生がアドバイスしてくれるのに何も声をかけてくれなかったことが悲しい」などと記されている。また、女性徒らしく、髪型に関して「かわいい」といってもらいうれしいとか、逆に自分で鏡をみて怒ったりする様子が描かれている。

生徒11はあまり特徴的なことはないが、試験の悪い点数に関して自分に「怒り」、よい点数に対して「喜び」、平均点がよいことで「悲しみ」を感じている。

生徒12に関しては「怒り」の記述に「相手をなぐってやろうかと思った」が加えられている。一方、些細な喜びも観じており「床屋でさっぱりした」とか「歯ブラシが新品」などと記している。

生徒13は喜びの最初の記述に「テレビの星占い自分の星座がややラッキー」としているが、空想的なところがあるのか、現実の自分の行動に基づいた喜びよりも今後を予想して喜んでいる。「今週は土日が休みだし、明日、好きなバンドのビデオがでるのでうれしい」「今日はクラブもないし、早く帰れると思うとうれしい」

生徒14に限ったことではないが、朝、眠いの起こされたり、準備が遅いといわれ怒りを生じている。また「隣の子のテストの点数がよい」ことも怒りとなっている。悲しみでは朝「今日も学校へいかなければ」ということで起こるとしている。また、喜びには「先生が体調不良で休みと聞いて」とか「学年主任の先生が出張だと聞いて」が含まれている。

生徒15は文字だけでなくイラストもあり、感情日誌の書き方自体が感情表現となっている。ジャニーズの松本潤(まつじゅん)に傾倒しているようで、喜びの感情のすべてはそれに関係している。学校でもその人の話をして喜んでいる。一方、怒りの感情に関しては級友のうる

ささに対して「死ぬ」と思ったとしている。悲しみの感情には鏡でおでこにニキビができているのを見て「1日5回洗顔しているのに」としている。

生徒16は相対的に怒りが多い。「目覚まし時計がならなかった」ことに2日間とも腹を立てている。さらに級友からつつかれたり、叩かれたり、悪口をいわれたりして怒っている場合が多い。ただし、悲しみになかには「担任が風邪で休みときいて」というものがある。先生が休みをとることはある子どもにとっては喜びだが、別の子どもにとっては悲しみである。

生徒17の記述には一つの事件が2つの感情を生起させることを示唆している。「給食中、級友にマーボー豆腐にふりかけをいれられ食べられなかったので悲しい」としているが一方で、「太り気味だからダイエットになってラッキー」としている。また、怒りは父母、教師など年上の人すべて向けられている。

生徒18の悲しみには「朝は一人で起き、一人で朝食を食べ、誰も見送ってくれない」というのがある。これはこの生徒にとって日常的なことかもしれない。

生徒19は学校や授業に対して回避的のように思われる。喜びの感情に「放課の時間になってうれしい」とか「やっと家に帰れる」という記述が複数回ある。

生徒20の場合、1日目の怒りは家族、特に父親に向けられたものが多かったが2日目は必ずしもそうでない。

生徒21の場合怒りと悲しみが同じ原因でおこっているケースが2回もある。1つはみんなとカラオケに行く約束をして喜んだが、母親に行ってはいけなといわれたことが怒りの感情も悲しみの感情も生起させたとしている。もう1つはクラスのある係をしており、放課後残って作業をしなければならなくなったことに対して怒りと悲しみを感じている。

生徒22：1日目の喜びに⑥脱日常が多い。ある授業で「勉強せずにビデオを見」たり「一斉下校でいつもより早く帰れ」たりして喜んでいる。

生徒23：めずらしいケースだが共感的怒りとでもいうものを感じている。すなわち、先生が友達にひどいことを言っていたことに対して怒っている。

生徒24：怒りが相対的に少ないという特徴がある。塾がないことがうれしいようで「今日は塾がない、考えただけでウフフ」としている。

生徒25：生徒21と同様に同じことから怒りと悲しみ両方の感情が生じている。家で母親と口喧嘩してそれが怒りにも悲しみにもなるし、授業中みんながしゃべっているさく、怒りがこみあげるが同時に「こんなクラス」と思うと悲しみも生じるという。

生徒26：怒りの中には母親に対してのものが多いが、

甘えている様子も窺える。たとえば、朝、「昨晚、母親に電卓が授業で必要とっておいたのに」として怒っているし、コンタクトレンズを買いに行き、母親が品物を決めたと怒っているが「けっこういいコンタクトレンズを買ってもらった」とも述べている。

生徒27：喜びの感情が自分の行為からだけでなく、友人の行為から生じているケースが多い特徴がある。「A君がきちんとごみを捨てているのを見て、いい人だと思った」「お昼の放送でBがしゃべっていた」

生徒28：空想の世界のことで悲しみが生じるようで「本の話をしていて悲しくなった」とか「漫画を読んで感動した」としている。一方、喜びでは友達にピアスを開けてやったことから感じている。

生徒29：怒りが相対的に少なく、学校でのことは何も記述していない。帰宅後2日間とも2時間ほどゲームをして楽しんでいる。

生徒30：友達からの働きかけに一喜一憂している様子がわかる。喜びとして「友達が親切にしてくれたからうれしい」とか「手伝ってくれたからうれしい」としている一方、「友達がすごく楽しそうだったからむかつく」とか「誰も相手にしてくれず悲しい」とも書いている。

生徒31：「リコーダーが上手く吹けた」「マウスで上手に絵がかけた」「数学の展開ができた」といった学習に関したことに喜びを感じているが、これは全体としては稀なケースである。テスト結果（点数）がよくて喜びを感じる生徒は多いが、学習の過程での喜びを記述している生徒は少ない。

生徒32：先の生徒31とは対照的に悲しみとして「テストが悪かった」、喜びとして「テストがよかった」という記述が多い。また、映画にも興味があるようで映画に関連した喜びや悲しみが目立つ。2日目はG賞の放送があったようだがそれに関する記述が3回もでてくる。

生徒33：怒りの記述から本人がクラスが時々うるさいことに腹を立てていることがわかる。悲しみの中に「友達が泣いていたので自分も悲しくなった」というのがある。共感もらい泣きか判断しがたいところだが、いずれにせよこのような悲しみは全般的に少ない。

生徒34：1日の最後で喜びの記述に「やっとねむれる」というのが2日間ともみられる。しかし、このような記述は特別なものでなく、他の人でも時々みられた。

生徒35：午前中の感情はすべて「腹がいたくなった」ことに関連している。腹痛が始まれば「怒り」や「悲しみ」が生じるが、回復すれば、痛かった分、「喜び」が生じる。

生徒36：記述の後にハートマークがつけられたものが多い。これらはいずれも好きな人と話したとか、好きな

人を見たというものである。また、悲しみの中には「ある詩に共感して泣いた」とか「母親がおばさんのことを悪く言うので悲しい」というような共感的なものもある。

生徒37：怒りは多くが級友との間で生じており、家庭でのものは皆無である。喜びはテストの結果等達成に関するものがほとんどであるが、「久しぶりに父をいれての食事だった」というものもある。

生徒38：喜びの中に友人が欠席したことが2日ともでてくる。これははじめを受けているというようなことが関連しているのだろうか。

生徒39：「友達に手伝ってもらった」とか「友達からいろいろな情報をえた」というような親和性に関する「喜び」が相対的に多い。

生徒40：2日間とも風邪のためか体調が悪く、それに関連した記述が大半を占めた。したがって、怒りと悲しみが多い。

生徒41：教師に対しては理由もなく腹を立てている「なんかむかつく、早くでていけ」とか「ちょうむか、クソババア」等と書く。また、クラスに対しても「うるさいから死ぬ、あほクラス」とか書いている。いうまでもなく、家族に対してはさらに過激である。「私がお風呂に入ろうとしたら、なんで父が入るんだ。なぐり殺すぞ」とか「兄、きらいってゆうか、男全員。だって Hentai なんだもん。死ぬ！ うっとおしい。消えろ」とある。

生徒42：3度の食事時に食事に関連したことで感情が生起している。

生徒43：怒りとして「朝、集会があった。めっちゃ寒い」とか「こたつが暖かった」など気温に関する内容が多い。また、顔のことを言われ、怒りだけでなく、悲しみも味わったとしている。

生徒44：学ぶ喜びが記されている「英語で外人の先生に私のカタコト英語が通じてうれしい」。また、親の心遣いに対しても喜びを表現している。

生徒45：クラスのとなりの人をいやな人としており、怒りをしばしば感じている。

生徒46：この感情日誌を書くこと自体が怒りであり悲しみであるとしている。

生徒47：学校にいる間中、腹痛と耳の痛み（外耳炎）を感じており、その間は喜びはない。

生徒48：怒りの中に「塾に行った」というのがある。いやいや塾にでかけていることが窺える。

討 論

本研究は中学生の日常的な感情をとらえようとするものであったが、方法的には何よりも「記述する」とい

う作業が大きな重荷になっていることがわかった。1日目より2日目で記述数がかなり減少することや、朝の方が夜の記述数より多いことなども記述の順序を考えると書くことの負担ということと関係しているようにも思われる。現在、同じような感情日誌を大学生に実施しているが、大学生の場合は中学生に比べて記述量が相当多いことを考えると、中学生は文章を書くことに習熟していないことによるところが大きいと思われる。そのため、面接で感情を聞き出す方法も考えられる（Lupton, D., 1998）。しかし、かわりに面接者に対する心理的抵抗の問題が生じてくる。

そのような意味では十分なデータとはいえないが、この研究から示唆されたことも少なくない。全体の分析ではクラスによって「怒り」と「喜び」の相対的多さが異なることが指摘された。日常的な感情はいわゆる雰囲気に近い面があり、クラスの雰囲気そのものが個人のそれに反映するものと考えられる。一方、「悲しみ」はどのクラスにおいても「怒り」や「喜び」に比較してかなり少なかった。

さらに2日間の感情の安定性という点からいうと相対的には「喜び」が最も安定しており、「怒り」が最も不安定であった。「喜び」という感情の背後には、物事を楽しく好意的に解釈しようというような態度なり性格特性的なもの強く働くのかもしれない。それに対して「怒り」は、むしろやや状況的な要因に依存して生じる面が多いといえよう。

本研究では相対的に記述数の多かったものだけについて質的な分析を行った。

「怒り」については仲間に向けられる場合が最も多く、悪口をいわれたりして生じるものもあるが、なんとなく顔をみるだけで怒りが生じるというようなものもあった。怒りの記述で印象的なのは相手に対して「死ぬ」とか「殺す」という言葉を簡単に用いていることであった。これは漫画やテレビゲーム等の影響によるもののように思われるが、すぐに短絡的に反応する傾向が表れているともいえる。また、多くの生徒に共通するのは朝の目覚めの悪さに関する「怒り」であった。

「悲しみ」の内容はこの感情日誌を実施した時期が期末テストの結果が返される時期であったこともあり、テストの結果が悪かったことをあげていた生徒が多かった。また、腹痛とか、風邪等の病気や身体的原因による悲しみも目立った。しかし、2日間だけであったこともあり、特別に深い「悲しみ」は生じていなかった。ところで全体的な分析からも「悲しみ」と「喜び」は相関が高かったが、「悲しみ」を感じられる人が「喜び」も感じられるという言い方が可能かもしれない。「悲しみ」

の中には自分が原因の「悲しみ」でなく、他者の立場を思っ悲しむという共感的な「悲しみ」が少しだけみられたが、このような「悲しみ」を感じられることが健全な精神の発達には必要と思われる。

「喜び」の原因は多種にわたっている。テスト結果が予想以上によいために生じているケースは多かったが、学習の喜びは結果に対するものに偏っており、学ぶ過程での「理解できた喜び」というようなものは稀であった。また、生理的な内容の喜びが意外に多かった。たとえば、「これで寝れる」というような表現が少なくなく、生活に疲れた大人の感じる消極的な喜びに類似している。しかし、現実にはそれだけ中学生が日常生活でストレス等を感じていることの表れかもしれない。また、「脱日常」として分類した喜びは偶然にルーチンワークから解放された喜びを意味していた。授業やクラブがなくなることの喜びと感ずるのは、これも学校生活自体に多くのストレスが含まれていることの証といえよう。他に歌手や俳優に傾倒して喜びの源泉がそこにある人もいた。残念なことは皮相的な喜びが多いように感じられることである。みんなと共同して何かをなし喜びを分かち合うというようなものはほとんどないように思われた。

ところで最初に問題にしたような「心の教育」ということに関してはこの研究からどのような提言ができるのだろうか。やや独断的な見方かもしれないが、感情には一人の個の中だけで働く感情と、外に開かれ、お互いの心をつなぐ感情があると考えられる。そのような観点からするとここで記述された感情は人と人をつなぐ感情があまりに少ないように思われる。たとえば怒りであれば、仲間が不当に扱われていることに怒るとか、社会的権力に対してみんなで怒るといったようなことは極めて少ない。悲しみも自分個人に向けられたものが圧倒的

で、テレビのニュースでかわいそうな人を見て悲しくなったというような記述すら少ない。まして現実場面では他者の悲しみの心に自分の感情が動くというようなケースは少ない。また、喜びもみんなで喜び合うというようなことが少ないように思われた。

ただし、この結果を最近の中学生の感情の持ち方の特徴と言い切ることはできない。そのためには現代の中学生とは異なる対照群をおいて比較するような研究が必要だろう。しかし、過去の青年の感情のあり方と現在の青年の感情のあり方を比較し、現在の特徴を明らかにするというなら、感情日誌は使えないわけで、他の方法が考慮されねばならない。

また、ここで使用した各感情の内容分析も著者の恣意的側面が混入していることは否めない。もう少し客観的なものにしていくべきだろう。

引用文献

- Lupton, D. 1998 *The emotional self*. SAGE Publications
- Oatley, K., 1994 The experience of emotions in everyday life. *Cognition and Emotion*, Vol. 8, 369-381.
- 荘厳舜哉監訳／比較発達研究会訳 1996 感情心理学 ナカニシヤ出版 (Carroll E. Izard 1991 *The psychology of emotions*. Plenum Publishing Corporations)
- Thayer, R. E., 1996 *The origin of everyday moods: Managing energy, tension, and stress*. Oxford University Press.

(1999年9月16日 受稿)

ABSTRACT

Why do junior high school students feel angry, sad and pleasant? : Using a diary of feeling

Toshihiko HAYAMIZU

Lately, some unexpected incidents have often happened in elementary schools and junior high schools. Concerning why those have happened, there might be somewhat peculiar causes. One of the causes seems to be related to how the students feel to external events. Thus, this study aims at making clear how and why junior high school students have some feelings in everyday life. To investigate feelings in everyday life, a new method named as a diary of feeling was proposed. Junior high school students were asked to describe how and why their feelings came about in open-ended form along the passing time for a couple of days. Feelings which students had to report was restricted to three kinds: anger, sadness and pleasure. In order to alleviate subjects' defensive attitude toward writing their own feelings freely, they were instructed to describe them in unsigned form, to seal up the completed diary and to submit it.

As a result, generally we did not get abundant information on students' feelings from the diary. Although the frequencies of three feelings were different from one class to another, as a whole, the feelings of pleasure were most frequently whereas the feelings of sadness were least. Also the consistency of the feelings between two days was highest in pleasure, lowest in anger.

Choosing 48 diaries in which over 10 incidents were written, contents of feelings were analyzed in detail. The cues and reasons each feeling happened were classified into 10 categories. Regarding with students' anger, teasing and abuse by their friends mostly often brought it. Turning to sadness, for most of students, getting poor achievements brought about it. Finally, feeling pleasant was most deeply related to physical satisfaction. Also they felt pleasant when they did not need to do routine work. In three kinds of feelings, they seldom held same feeling as others did, that is, they seldom sympathized each other.